

# 人口移動のパターンと社会生活の変貌 -上海大都市圏周縁のK村の事例-

名古屋大学大学院環境学研究科 黒田 由彦<sup>1</sup>  
名古屋大学大学院環境学研究科 高野 雅夫  
名古屋大学大学院環境学研究科 林 良嗣

## Pattern of Urban Migration and Transformation of Social Life -The Case of Shanghai Metropolitan Region-

Yoshihiko KURODA, Masao TAKANO and Yoshitsugu HAYASHI  
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

### Abstract:

The purpose of this paper is to review patterns of the urban migration in China after the Reform and Door-Opening Policy, and to illustrate how a urban way of life has been diffused based on the fieldwork in K Village which is located in the outskirts of Shanghai Metropolitan Region.

**Keywords:** *Urbanization, Urban Migration, Urban way of life*

### 1. はじめに

都市化とは、一般に工業化・サービス経済化に伴い、人口が農村から都市に移動する現象を意味する。社会学的視点からは、単に農村から都市への人口移動を意味するだけでなく、生活様式が農村的なものから都市的なものへ変化することも意味する。

ここで都市的生活様式とは、市場における商品の豊かな供給に依存しながら物質的豊かさを志向する生活様式を意味している。具体的には、家電製品に代表される耐久消費財や自家用車の所有、大量生産・大量消費の普及、上下水道のような行政機関によって供給される都市インフラへの依存の高まりを指している。

都市化に伴う都市的生活様式の普及は、都市だけで起こる現象ではなく、人口を排出する側である農村でも多少のタイムラグはあっても都市と同様に生起する。

よりマクロな視点から見れば、都市化とは

比較的ローカルな範囲で経済循環が完結していた地域が、グローバル経済システムに組み込まれる過程である。地域システムがグローバル経済システムの一部になればなるほど、地域はグローバル経済が固有に持つ力学に翻弄されるようになる。グローバル経済システム自体、ヒエラルキー構造をもっており、都市化した地域がグローバル構造のどの位階に組み込まれるかによって、自律性が失われる度合いが変わる。ただ、いずれにせよ、都市化とは一つの地域が自ら主体的にコントロールできないグローバル経済システムに組み込まれる過程である点には再度注意を促しておきたい。

本稿の目的は、改革開放政策以後、急速な経済発展に伴って急激に都市化が進む中国を取りあげ、農村から都市への人口移動にどのようなパターンがみられるかを振り返った上で、都市化に伴ってどのように都市的生活様

式が普及したかを、特に上海大都市圏の周縁に位置する村の事例を通して明らかにすることである。

## 2. 改革開放政策の進展と都市化

中国においては、急速な経済発展に伴い、急激な都市化が進行している。2009年には都市人口の割合が約47%となった。いわゆる「南巡講話」を契機として経済成長に拍車がかかる以前、都市人口の割合が約27%であったことを考えれば、この20年間の都市化のスピードの速さをうかがい知ることができよう（以上、統計数字は『中国都市統計年鑑』）。同時に、欧米や日本のような先進資本主義国家の都市人口の割合が2割～3割であることを考えると、中国の急速な都市化は今後20～30年程度は継続すると予想される。

中国を急速な都市化の渦に巻き込んだ直接のきっかけは、1978年に始まる改革開放政策である。それ以前の社会主義計画経済体制時代においては、1956年に確立した戸籍制度によって、農村から都市への人口移動は厳しく制限されていた。

疲弊した経済を再建することを目的とした改革開放政策の基本方針は、第一に市場経済を導入すること（改革開放の「改革」）であり、第二に外国から資本や技術を導入すること（改革開放の「開放」）であった。この方針に沿って、80年代前半に農村改革が実施された。人民公社の解体と経営請負制の導入、および農村の工業化がその内容である。農業生産は急速に回復し、同時に郷鎮企業と呼ばれる村営の企業が発展した。この農村改革に続いて、沿海都市へ外資導入によって労働集約型産業を育成する政策が実施された。

労働集約型産業の集積は、大きな労働力需要を生み出したが、それらは農村から調達された。貧困な農村から沿海部の豊かな都市への労働力移動が起こったわけである。しかし政府は都市住民と農村住民を厳然と区別する戸籍制度を維持し、労働力の自由な移動を容認しなかった。たとえば若い女性労働力が数年都市で働いた後は帰村することが前提とされ、都市への恒久的な移住は想定されていなかった。

1992年に鄧小平の南巡講話以後、社会主義市場経済路線が確立する。計画経済を捨て、市場経済をめざすことが国是となり、90年代半ばから国有企業改革が本格化する。都市の市場経済化が進むにつれ、農村から都市へ移動する労働力はますます不可欠となり、事実上都市に恒久的に居住する元農民が増加してくる。

このように政府の統制から外れる動きが徐々に出始めると、農村から都市へ移動する農村労働者は当初「盲流」と呼ばれた。「盲流」はそのネガティブな語感が問題視されて、「民工潮」と呼び直され、その後「農民工」と呼ばれるようになって今日に到る。

現在でも戸籍制度は基本的に維持されており、農民工は統計上「流動人口」と位置づけられている。農村戸籍をもった流動人口が都市の内部にいわば二級市民として蓄積されているといえる。たとえば上海市1800万の人口のうち流動人口はおよそ3分の1の600万人にのぼる。彼らの生活条件は、都市戸籍をもった市民よりも厳しい状況におかれている。具体的には、不安定な雇用、低賃金、医療保険や年金の欠如などである。正式な都市戸籍がないので子供の教育にもハンディがある。子供の将来を考えて評判の良い学校に入学させようとすると学校から「借読料」を要求されたなど、差別的な挿話には事欠かない。

さて、90年代後半以降、中国の経済成長は加速して今日に至るが、それを生み出した一つの要因として所有権改革を外すことはできないと思われる。いま上に触れた国有企業改革もその核心部分は所有権改革（「産権改革」という）であった。所有権改革によって、国有企業に囲いこまれていた膨大な土地・建物が市場に放出された。それは都市再開発の奔流を生み出し、同時に土地利用権の売却によって莫大な余剰資金を手に入れた政府によるインフラ投資、市民による不動産投資をもたらした。中国全土が開発主義に覆われていくのである。90年代前半にはまだ珍しかった高速道路が、現在では中国全土に張りめぐらされ、その片鱗もなかった高速鉄道が現在では主要都市を結ぶまでに整備されに至った。

その結果、00年代後半には大都市圏では都市化は成熟化の段階に入ったとみられる。都

市の景観、都市インフラ整備の水準、都市的生活様式の普及度、どれをとっても上海や北京はすでに東京に比べても遜色がない。もちろん中国全体を見れば、農村から都市への人口移動は続いているが、「農村→都市」という単純な枠組みで中国の都市化を捉えることができた段階は終わったと言えよう。

「開発後進地の農村→開発先進地の農村」、「開発先進地の農村→都市」、「中小都市→大都市」、「開発後進地の農村→外国→大都市」、「メガリージョン化する大都市圏の内部移動」など、さまざまな動きを射程に入れなければならない段階に入っているのである。

もうひとつ指摘しておきたいのは、90年代後半以降の中国の都市化が、都市をグローバル経済システムに組み込んでいく過程であったという点である。2001年12月のWTO加盟はその動きを加速させた。上海はグローバル経済システムが織り上げた都市ヒエラルキーに組み込まれ、短時間のうちに東アジアにおける「世界都市」の地位を獲得した。現在は上海のランドマークとなっている浦東地区の金融街の摩天楼群はその象徴である。

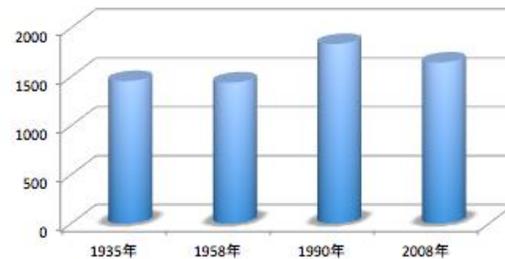
### 3. 上海大都市圏周縁のK村の事例

われわれは2011年10月に上海大都市圏の周縁部に位置するK村でフィールドワークを行った。都市化において人口を都市に排出する側である農村の社会生活がどのように変貌してきたかを定性的に分析するためである。村を歩いて観察するとともに、農業経営、家族関係、ライフスタイルがどのように変化してきたかを把握するために、村長や村の幹部を対象としてヒアリング調査を行った。その際、村が独自に作成している統計資料等の提供を受けた。ここからの記述は、そのインタビューと統計資料に基づくものである。

K村は上海から高速道路で北西に約2時間、江蘇省蘇州市の南部に位置する。行政的には県クラスの市である呉江市に含まれる。村の北にはすぐ太湖がある。面積は4.5km<sup>2</sup>、長江下流域の水郷地帯に位置する村の中には水路が走り、村を囲むように池が点在する。図1に人口の推移を示す。ただしこの人口は

20世紀初頭、日本に留学して養蚕の技術を

図1 人口の推移



出典：村提供統計

学んだ村民によって、水田耕作が主であったこの村に養蚕と絹織物業が導入される。そこからこの村は稲作に加えて、養蚕と絹織物業で発展する。戦争で工場は破壊させるが、1949年の中華人民共和国の建国後、養蚕と絹織物業は復活する。

改革開放政策の農村改革によって、この村でもいくつかの郷鎮企業が紡績業・織物業を営んだ。1990年代末に郷鎮企業の改革が実行され、村営であった郷鎮企業が私有化された。言い換えれば、村人に安く払い下げたのである。企業経営者となった村人は事業を拡大し、村の中で富裕層を形成していく。90年代に進む所有権改革の一端である郷鎮企業の私有化は、「社会主義市場経済」の原動力となる資本家を導出したと言えよう。ヒアリング調査によれば、村でもっとも大きい紡績工場の社長の年収は、村人の平均年収の100倍であるという。村人たちは「チャンスに恵まれた」者の成功と、「恵まれなかった」者との格差を、村の中で日々目の当たりにしている。

現在は大中小とりまぜて約600の紡績業・織物業の工場があるが、化学繊維を使うのが主流となっている。自動化された織機が並ぶ工場で働いていたのは、内陸の村から出稼ぎに来ている若者たちだった。彼らは工場のすぐ隣で寝起きしながら働いている。休みは週1日、故郷に帰るのは春節くらいである。

稲作と養蚕でなりたっていたこの村の農業が大きく変化したのは、この10年、なかでもこの5年ほどである。繭の生産高は1996年をピークに急減し、それに伴い桑畑も急減した。水田は00年代に入って減少していたが、ここ

5年で急減する。代わりに急増したのが魚池である。水田・桑畑の10%ほどは道路や工場となり、残りは「魚池」、つまり養殖場となった。のである。村では見渡す限り、田を掘って水をはった池になっている。ここで上海蟹とエビを養殖している。農地は宅地周辺にわずかに残る自給的な野菜畑と水田のみとなった。

なぜこのような変化が起きたのだろうか。単位面積あたりの収益を比べてみると、稲作と繭生産は1ムーあたり(1ムーは中国の土地の面積単位で、667 m<sup>2</sup>=約0.7反)600元ほどであるのに対して、魚池は2000元を超える。この地は、太湖の水が流れ込む水の豊かな地域で、しかも水質は周辺の汚染のすすんだ地域に比べればよいという。これにより収入は10年前の3倍になった(村の統計による)。

村の住居は、最近建て替えたと思われる、立派なものが目につく。話を聞くと、「魚池」でもうけたり、商売をしてもうけたりして、家を建て替えているのだという。家の中は最新の家電製品が揃えられ、電動バイクは必需品である。自家用車をもつ家が目に見えて増えているという。

しかしそれでも地元の若者たちは、都市に出て行く。農業で収入の増加をめざすよりは、都市部の工場やサービス業で働くことを選択するのだという。村に戸籍を残したまま、都市に働きに行っている人が多いようで、その数は村の統計に現れない。この村の若者たちは上海とその周辺の都市に働きに行き、もっと内陸の若者たちがこの村に来て働くという、農村から都市への人口移動に関して一種の玉突き現象がおきている。

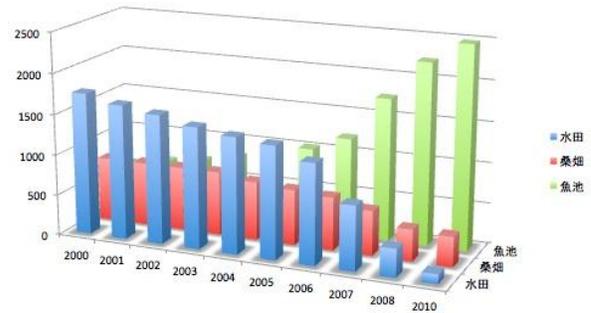
われわれはウィークデイの昼間に村を歩き、そこで出会った村人たちへインタビューを試みた。ほとんどが高齢者であった。彼らは「この村の発展は遅い」と言い、そのことに不満をもらした。客観的には確実に豊かになっているにもかかわらず、むしろ逆に不満がつるという逆説的な状況があることがうかがわれた。

#### 4. 考察

まず農村から都市への人口移動のパターンの観点からK村がどう位置づけられるという

点であるが、上海大都市圏の周縁部に位置す

図2 水田・桑畑・魚池の面積推移



出典：村提供統計

る村であり、村落としては比較的豊かな部類に属する。しかし、主として若年人口の都市への流出は続いている。流出先はこの大都市圏の中心都市である上海である。人口流出と同時に周辺部の農村からの流入人口もある。流入と流出の結節点に位置するのがK村である。

産業はこの近年、変化が激しい。稲作、養蚕、絹織物業、紡績で安定していた産業構造は、過去5年間で激変した。稲作と養蚕が衰退し、代わって養殖漁業が急激に発展している。出荷先は上海であり、都市化に伴う消費水準の向上と連動した変化である。産業構造の変化は、同時に所得水準向上のプロセスでもあった。そして、豊かになるにつれ、この村の住民自体のライフスタイルも変容してきた。一言で言えば都市的生活様式が普及している。

所得水準の向上、それに伴う都市的なライフスタイルの普及は、ある種の意識の変化も引き起こしているようだ。脱農志向は強いものの、農村戸籍を捨て、都市戸籍を獲得しようというインセンティブが低下している。そこには、少なくとも上海大都市圏の成長が続けば、この村の農村戸籍の経済価値が上昇すると見込めるという発想が見え隠れしているように思われる。

---

<sup>1</sup> 著者連絡先            黒田 由彦  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院環境学研究科  
E-mail: krd@nagoya-u.jp